研究の意義を「問う」ことの必要性と難しさ

曽田　三郎

1．人文学系学問への自省

本誌が[*1]、近現代中国研究の意義を問うという企画を立てた、その詳しい経緯はわからないが、執筆の依頼にあたっていただいた「趣旨」によると、「実学」の重視、学術的な（あるいは実証的な）近現代中国研究の社会的意義の希薄化という認識があるようである。確かに、中国研究を担う教員の公募数が少なくなっていることは実感するし、またアジアや中国を対象とする学問へ興味を抱く学生も減少している。後者の点については、所属する大学によって実状は異なるかもしれないが、私の実感からすれば、歴史学の領域では日本史や西洋史への学生の人気は低くない。だがそれは研究の意義が十分に認識され、また伝達されていることの結果であるかといえば、必ずしもそうではなかろう。

歴史学のみならず、文学・哲学等の人文学系の学者は、自らの学問について「意義を問う」あるいは「意義を問われる」ことの必要性を、どの程度認識しているのであろうか。そもそも意義を「問う」「問われる」筋合いはないと、考えている学者もいるのではなかろうか。一方、理工学系や医学系の学問の多くの分野においては、学者の意志に関わりなく、意義が問われるのであり、問われた結果も比較的容易に客観化ができる。そうであるが故に、これらの分野では競争や評価が厳しくなるのであり、この点を我々はまず素直に認める必要がある。したがって研究の意義を問うという作業は、人文学系の学問全体について自省することから始めなければならないと、私は考えている。

私は国立大学の法人化と同時に、部局の運営に携わることになった。その結果、私個人の自由な研究時間は制約されたが、現在の人文学系の学問が抱える問題点を、よく認識できるようになったと思う。その問題点を、会議での問答形式で表現すれば、次のようになる。「それは嫌だ」「あれはやりたくない」、「それではあなたはどうしたいのですか」、と。この問答にうかがい知れることは、個人の営みへの依存度の高さと結果の客観化の曖昧さという、人文学系学問の特性である。だが大学等での研究に対する要求は、いずれの点においても逆の方向にあり、それが人文学系の学者のすわり心地を悪くしている。

大学を取り巻く環境、とりわけ人文学系の組織を取り巻く環境が、近年とくに厳しくなっていることは、あらためて指摘する必要もないであろう。また、この環境に関する問答の範囲内であれば、何のいさかいも生じない。なぜなら、もっぱら環境の悪さをあげつらうことによって、誰もが同じ側に立つことができるからである。だがこれに終始していたのでは、人文学系の学問はなお一層の窮地に陥ることになろう。なぜなら、研究者本人の「私」の範囲を越えて研究の意義を表明

[*1] 本文は中国現代史研究会の 40 周年企画「近現代中国を研究することの意義を問う」のひとつとして、『現代中国研究』26 号（2010 年 3 月）に掲載された。本稿の入力は鈴木昭吾氏の支援を得た。

しなければ、誰も振り向いてはくれないからである。

人文学系の学問を研究者個人の「私」の領域から解き放ち、成果の客観化を図っていくためには、研究をするという行為に対する意識の転換が必要ではなかろうか。理工学系や医学系の研究は、一定のグループで進められ、成果も共同の名義で公表される場合が多い。したがって研究テーマの設定や意義、研究遂行上の方法、得られるであろう成果とその社会的利害等をめぐって、相互に検討し批判できる契機が内在している。もちろんこれは職位上の上下関係に関わらず、グループ内での発言の自由が保障されてのことであるが、現在のように成果に対する検証のシステムが整備されているのであれば、共同作業の結果が個人に与える影響は大きく、個々の参加者は共同性のなかに埋もれているわけにはいかない。

これと異なって、人文学系の学問は、基本的に研究者個々の営為に頼っており、これからもこの点は大きく変化することはなかろう。研究テーマの設定やその意義づけ、それに研究の進め方は個人の判断によって行われ、得られた成果も個人名義で発表される場合が大部分である。また発表された成果に対する検証の機会は皆無ではないが、システムとしてではなく、書評や論文評のようなかたちで個人によって行われる。したがって人文学系の学問においては、研究の開始から成果の公表、およびそれに対する批評まで、研究者個人の創意・能力・見識にゆだねられる度合いが高いのである。

このように、人文学系の学問は理工学系等のそれに対して、研究の進め方や批評のあり方が異なっているが、それは学問の性格に起因しているのであるから、共通する評価の基準や方法等を導入することは、そもそも適切ではない。たとえば、論文の発表数を競い合うようになれば、むしろ研究水準の低下をもたらしかねないし、外国語で著書や論文を発表すれば、それで研究の質が向上すると考える人文学系の学者は、ほとんどいないであろう。しかしだからといって、他の学問分野からの、あるいは社会からの批評や評価に対する備えに、無関心であってよいというわけではない。その備えとして欠かせないのが、研究の意義の自覚と表明である。このことを怠ってしまうと、研究するという行為とその結果が、やはり「私」の領域から抜け出せないことになってしまう。

人文学系の学問では、個々の研究者の創意と努力に基づいて研究が行われており、国内的であろうと国際的であろうと、その成果を検証して意義づけるようなシステムが存在しているわけではないし、評価の客観化も困難である。そうであるが故に、人文学系の学問においては、その学術的・社会的意義は「問われる」のではなく、「問う」ことが必要になってくるのである。こうした学問の固有性は、一面で研究の自由を保障してくれているともいえるが、反面では、甘えの温床となっているともいえるのである。自由と甘えという、この重い二つの道標を、我々は選択肢として有しているのであり、研究を進めるうえでの研究者自信の意識の鍛錬を欠いてしまうと、甘えの道筋に入ってしまうことになる。この研究者としての意識の鍛錬という点で、何よりも重要なことが、自らが進めようとしている研究の意義の自覚と表明であろう。

2．近代中国研究の意義を考える

私は大学で教育に従事するようになって、三十数年になるが、中国近代史の研究を志望する学生

に対しては、広範囲にわたる書物や論文を読むことを勧めてきた。このようにいうと、当たり前のことのように聞こえるかもしれないが、別の表現をすれば、はやくから専門家のようになって、史料を読む技法を身につけることを、勧めなかったということである。その理由は、最初の職場が教養部を改組した地域研究を基礎とする組織であったこと、次の職場が経済学部だけの単科の大学で、専門の学生がいなかったことにもあるが、現在においても、このスタイルはあまり変わっていない。

このような教員としての私のスタイルに影響を与えたのは、大学入学時以来の経験である。このことはすでに別の雑誌で書いたことがあるので、ここでは繰り返さないが、その頃に芽生え、今でも変わらないのは、日本の近世・近代史への関心である。私の個人的経験に即していえば、大学入学以来の数十年間に、この近世・近代史の研究は大きな変化を遂げている。この変化は、近代中国研究にとって無縁なことであろうか。現在の私の関心が及ぶ範囲でいえば、たとえば中華民国の北京政府期を研究するにあたって、大正期日本の立憲主義と帝国主義に関する研究への理解は、欠かせないように思う。

研究の意義を問題とするとき、意義が認識される範囲に自明のものがあるわけではない。一概に広ければよいとは思わないが、かといって読み手がいなくては、意義は自然消滅に近い。歴史学を含む人文学系の学者は、著書の刊行や論文の発表にあたって、読み手の側への意識が希薄ではないかと思う。極端にいえば、読み手のことがほとんど念頭に置かれていないのではないかとさえ思う。しかしいうまでもなく、書き手は読み手があってこそ存立し得るのである。一般的にいうならば、この読み手の範囲が広がることは、自らの研究の意義を問う意味で、単に量の問題ではなく、多様性という観点からも歓迎すべきである。私の学生に対する助言にも、こうした意識が働いているのであるが、これまで東洋史学をはじめ、中国を研究の対象とする学問は、なかでも内向きで、読み手をむしろ制限してきたように思う。

実証性は、学問である以上、人文学系にとどまらず不可欠な要素である。だが実証性に埋もれてしまっては、読み手を制限し、研究の意義を検証する機会を乏しくしてしまう。実証の作業は研究にとって欠かせないプロセスであり、その深度は成果に大きな影響を及ぼすはずである。しかし成果は、実証作業の自然の成り行きによって生まれるわけではない。史料に基づいて確かなものとして認定された諸事実も、それを意味づけることによって成果となる。その意味づけ方をどのように行うのか、書き手以外には意味が見出せないのでは、緻密な実証作業の結果も意義がないに等しい。この成果がもたらす意味の検出の広がり具合を、我々はより意識して研究を行う必要があると思う。

『史学雑誌』の 2008 年の歴史学界の「回顧と展望」（中国―近代）のなかで、業績を量産する「学術資本主義的世界」への疑問が提示されている。現状への認識は、私も同じである。業績の量産が生じる原因は多々あろうが、一つは利用できる史料の拡大である。私が研究を始めた頃と比較すれば、近代中国研究の史料面での環境には、文字通り雲泥の差がある。しかし利用できる史料の拡大は、研究の質的向上に直結するわけではない。たとえば中国等で希少な原記録を発掘し、それを解読することで、それまで知られていなかった一定の事実が発見されたとしよう。それを

材料に、すぐに文章を書こうとする欲求が生まれてくるのは、当然のことである。だが、とくに若い研究者にとっては難しいことかもしれないが、ここで踏みとどまって考えてみる必要があるのは、発見された事実の意味が及ぶ範囲、すなわち意義の度合いであり、時にはその欲求を抑制する必要もある。

私自身に即していえば、研究の成果に意味が及ぶ範囲として自覚しているのは、近代の中国から日本である。こうした自覚は、約 15 年前に公刊した製糸業史研究のときからあったが、近年とくに注目しているのが、日本近代政治史研究の到達点である。それをよく理解して近代中国の研究を行うのと、ただ近代中国政治の枠内に終始して研究するのとでは、創意、分析の枠組み、得られる成果の意義において、大きな差が生じるように思える。我々は、自国史を研究対象としているわけではないという「強み」を、もっと自覚してもよかろう。自国史研究者ではないが故の、比較史、関係史のより豊かな可能性に対する自覚である。

比較や関係の対象は、もちろん中国・日本に限定する必要はないが、ここでいわんとしているこは、中国での原記録の発掘と分析という、研究の対象の内側に入り込むことによる実証性の深化だけでは、研究の意義に限界があるということである。むしろ研究の対象である近代中国を自覚的に他者として位置づけ、日本という自国に対する研究で得られた到達点をその他者への研究に活かすとともに、他者の研究によって得られた成果によって、近代日本を見直すという、そのような研究の広がりを、私は目指している。